

看護師による退院指導の有効性

— 婦人科良性疾患による開腹手術を受けた患者のアンケートを通して —

A棟5階南

○阪本 侑希 寺田 有紀
中嶋 照代 川北 純子

I. はじめに

2006年の先行研究において、多くの患者は看護師による退院後の日常生活や、羞恥心を伴う性についての退院指導を望んでいた。当病棟の術後患者は主治医にて退院説明は行われていたが、看護師による退院指導は行なっていなかった。そこで今回、開腹手術を受けた良性疾患の患者に対して、改善したパンフレットを用いて、看護師による退院指導を行った。

II. 目的

看護師による退院指導の有効性について明らかにする。

III. 研究方法

1. 対象は2007年7月～2007年9月に婦人科良性疾患にて開腹手術を受けた患者26名(45.38 ± 14.62、18歳～70歳)を選択した。
2. 調査期間
2007年7月1日～9月30日に実施した。
3. 研究方法

主治医が術後の経過について説明した後、家事開始時期などの日常生活・羞恥心を伴う性生活についての内容を踏まえた退院パンフレットを用いて、看護師による退院指導を行った。そして独自にアンケート用紙を作成し、2006年の先行研究にて退院時・退院後に思う疑問は異なるという結果が得られたため、退院時、退院後(退院2週間後)の2回に分けて調査を行った。

退院時：退院指導やパンフレットの内容について質問し、病棟に設置した回収箱にて回収した。

退院後：パンフレットの利用回数や、自由記載にて困ったことや不安に思ったことなどを質問

し、退院後の初回外来受診時に外来に設置した回収箱にて回収した。

また、両アンケートにおいて看護師による退院指導の時期、退院指導の必要性、退院指導のわかりやすさの3項目について6段階スケールによって測定した。

4. 分析方法

単純集計を行い、看護師による退院指導の時期、退院指導の必要性、退院指導のわかりやすさについてMann-Whitneyテストを利用して、退院前後で比較・検討した。また、年齢による認識の違いを比較するため、平均年齢が45.38歳であることより45歳以上(退院時：14名 退院後：8名)・44歳以下(退院時：12名 退院後：7名)に分類し同テストにて比較検討した。

5. 倫理的配慮

調査内容は研究以外に使用しないこと、この調査に参加しない場合も診療上不利益を生じないことを説明し、同意を得た患者を対象とした。

IV. 結果

アンケート配布者26名、アンケート回収者は退院時：26名(100%) 退院後：15名(57.7%)であった。有効回答率は退院時・退院後共に100%であった。平均年齢は45.38 ± 14.62歳であった。

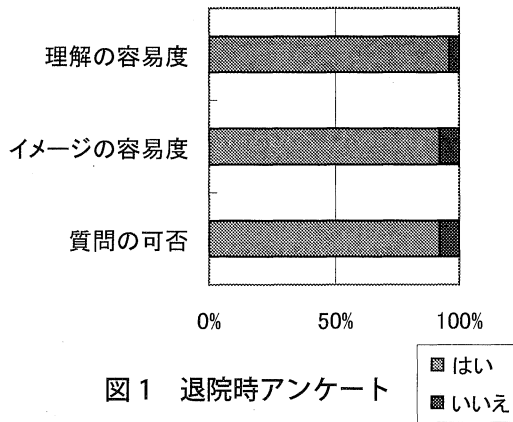


図1 退院時アンケート

退院時アンケートにて「退院パンフレットの内容は理解しやすいものでしたか」は、はい25名(96%) いいえ1名(4%)、「退院後の生活はイメージしやすいものでしたか」は、はい24名(92%) いいえ2名(8%)、「退院指導時に疑問や不安は質問できましたか」は、はい24名(92%) いいえ2名(8%)であった。

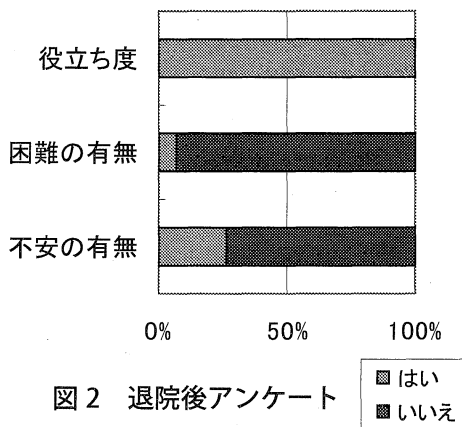


図2 退院後アンケート

退院後アンケートにて、「退院後パンフレットは役立ちましたか」は、はい15名(100%)、「退院後の生活で困ったことはありますか」は、はい1名(7%) いいえ14名(93%)、「退院後の生活で不安なことはありますか」は、はい4名(27%) いいえ11名(73%)であった(図2)。

以下は、各項目の自由解答欄への主な記載である。

- パンフレットの内容以外で知りたかったこと
「子どもはすぐに産んでもよいのか」
「生活様式に合わせた活動開始の時期」
「仕事の復帰や旅行」
- 退院後の生活で困ったこと
「食事をつくること」

3. 退院後の生活で不安なこと

- 「子どもと遊ぶこと」
- 「ちょっとしたお腹の張り」
- 「痛みが正常なものかどうか」
- 「漠然とした不安」

図3～6の6段階は以下に示す通りである。

- | | | |
|----------|-----------|-----------|
| 1.全く思わない | 2.かなり思わない | 3.あまり思わない |
| 4.少し思う | 5.かなり思う | 6.非常に思う |

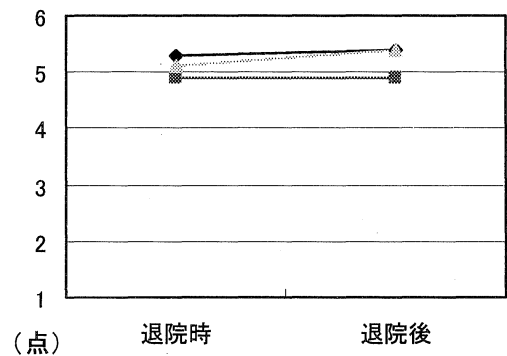


図3 看護師による退院指導

退院時・退院後それぞれにおいて看護師による退院指導の時期、退院指導の必要性、退院指導のわかりやすさを Mann-Whitney テストを用いて比較した結果、有意差は見られなかった(図3)。

次に年齢による比較についての結果を述べる。アンケート回収者退院時26名中44歳以下の患者は12名、45歳以上の患者は14名であり、退院後15名中44歳以下は7名、45歳以上は8名であった。

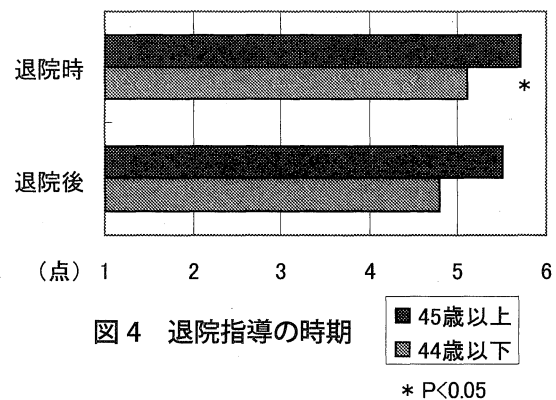


図4 退院指導の時期

退院指導の時期については退院時有意差あり45歳以上の群が良いと回答(p < 0.03)、退院後有意

差はなかった ($p > 0.05$) (図 4)。

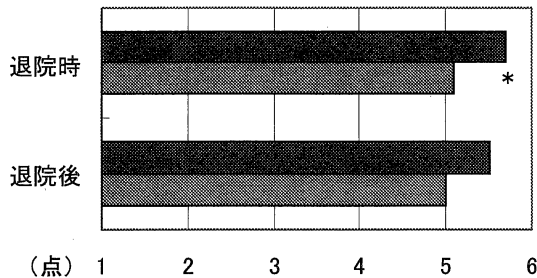


図 5 退院指導のわかりやすさ ■ 45歳以上
■ 44歳以下
* $P < 0.05$

退院指導のわかりやすさは退院時有意差あり 45 歳以上の群が理解が容易であると回答 ($p > 0.03$)、退院後有意差はなかった ($p > 0.05$) (図 5)。

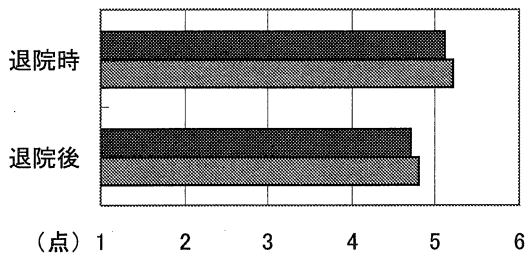


図 6 退院指導の必要性 ■ 45歳以上
■ 44歳以下

看護師による退院指導の必要性は退院時・退院後共に有意差はなかった ($p > 0.05$) (図 6)。

V. 考察

先行研究でパンフレットによる退院指導の有効性と看護師による退院指導の必要性がわかった。退院指導について飯田は「病棟看護師が疾患の日常生活への影響を中心とした食事や服薬等に関する指導だけでなく、退院後の生活を視野に入れた、より包括的な退院指導を行なうことが必要である」と述べている¹⁾。今回実際に上記を踏まえた退院指導を実施したことで、内容が理解しやすく、退院後の生活がイメージしやすいものであるという結果が得られた。猪野は「患者は女性機能の不安や悩みを、医師よりも看護師の方が年齢にこだわらず相談しやすいため、看護師による指導を望んでいる。」²⁾と述べている。今回、退院後の生活において困ったことや不安があるという回答が少なかったことは、看護師による退院指導を実施することで退院時に生じる疑

問や不安を質問できる機会を持つことができたためと考える。

また、先行研究でも述べたように、患者は術直後、創部や疾患に意識が向いており退院後の日常生活までは考えられないという心理が働いている。今回、このことを考慮し、医師による術後の経過説明によりその不安を解消したあと、日常関わっている看護師によりパンフレットを用いた日常生活についての退院指導を行なった。そのため看護師による退院指導の時期、退院指導の必要性、退院指導のわかりやすさにおいて、退院前後に有意差がみられなかった。このことから、適切な退院指導を行えたのではないかと考える。

次に、年齢による比較についての考察を述べる。44 歳以下群と 45 歳以上群で退院指導の時期・内容のわかりやすさについて有意差を認めた。しかし、必要度においては年齢による差は見られなかった。このことは、44 歳以下群の平均年齢は 31 歳であり、ライフサイクルの面から結婚・出産・育児に直面している時期にあたるためと考える。つまり 44 歳以下群のほうが、自由解答の内容からもわかるように、妻・母親としての役割りを担っているため問題意識が高かったのではないかと考える。以上のことから、看護師による退院指導は必要であり、社会的・家庭的立場を踏まえた個別的な退院指導を行なっていくことが必要である。

VI. まとめ

- ・退院後の生活を視野に入れた看護師による退院指導は内容が理解しやすく、退院後の生活がイメージしやすいものであった。
- ・看護師による退院指導を実施したことで、退院後の生活で困ったことや、不安に思ったことが少なかった。
- ・医師による術後の経過の説明後、看護師によりパンフレットを用いた日常生活についての退院指導を行なったことは適切であった。
- ・妻・母親としての役割りを担っている患者は看護師による、より個別的な退院指導を必要としている。

引用文献

- 1) 飯田晴美：病棟看護師による退院指導の現状，第 35 回日本看護学会集録（成人看護Ⅱ）p9-11，2004.
- 2) 猪野亜希子：子宮摘出術後患者の性生活指導の検討，第 34 回日本看護学会集録（母性看護），p91-93，2003.

参考文献

- 1) 秋元典子：子宮全摘出術を受けた患者の体験に関する記述的研究，看護展望，p90-97，1997.
- 2) 中嶋真澄：子宮摘出術を受けた患者の女性性喪失感についての意識調査，第 33 回成人看護Ⅱ，p78 - 80，2002.